清末の陸軍貴胄学堂と八旗学堂に関する調査報告

胡　穎
（外国語学研究科　博士課程）

報告者は清末における留日学生の生活実態に関心を持っており、最近では、清朝統治者の子孫或いは八旗（八旗は清朝における旗と呼ばれる社会・軍事集団からなり、すべての満州族は８個の旗のいずれかに配属された）子弟の留日生活は一般の留学生の状況とどこが違うのか、ということに興味を広げている。2014 年 12 月 23 日から 2015 年 1 月 7 日の 16 日間、非文字資料研究センターの若手研究者として、中国の北京師範大学の民俗学と文化人類学研究所を訪問するチャンスを頂いた。今回の訪問機会を利用して、留日学生の中で特別な存在であった貴胄（王公大臣の子弟）留学生及び八旗子弟の留学生を送り出した陸軍貴胄学堂と八旗学堂の旧跡及び関連史料について調査してきた。

清末の貴胄留学と八旗子弟の留学は一般の留学生に混じり、最も早い段階から実施されている。例えば、清朝政府に大きな影響力を持っていた張之洞は 1899 年に孫の張厚琨を学習院に送っており、その後も統治者は子孫の教育を重視して海外留学に派遣している。1902 年の外務部の文書では、海外の留学生派遣を貴胄学生、官派学生、遊学学生の３種類に分け、「貴胄留学」をその一種として提起していることからその重視ぶりが分かる [1]。その後、1904 年に光緒帝は「宗室子弟」の海外留学を促す上諭を出した。1907 年になると、外務部、学部などは、貴胄留学に関する「請派貴胄出洋游学折」を上奏するとともに、「貴胄游学章程」を定めた [2]。こうして、貴胄留学は清政府に重視され、それ以降も続いているのである。

次にその「貴胄游学章程」の中のいくつかの内容を見ると、貴胄留学の学生は、すべて王公大臣の子弟及び貴胄学堂の優秀者から選抜していることがわかる。派遣先は英米独三国で、勉強科目は法政、軍事で、留学期間は三年となっている。また、一人の留学生に支給する金額について、旅費は七百銀両、毎月の経費は三百銀両、衣服などの準備代は五百銀両である。召使いをつけるならば一人に限る。そのほか、通訳と漢文教習は一人ずつ付ける。このような条件から見ると、かなり優遇されたことが分かる。しかも、清朝政府はこの「章程」を定めてからまもなくの 1907 年 12 月に宗室貴胄 20 名を留学させ [3]、その他の貴胄留学としては 1909 年に陸軍貴胄学堂から陳昌彀、成全など 20 名を選び留学させた [4]。

写真１

写真２

1906 年に陸軍貴胄学堂が設立され、最初の校地に現在の煤渣胡同が選ばれたが、そこは狭くて軍隊訓練には不便なため、現在の張自忠路３号を新しい校地とした。張自忠路３号は当時、鉄獅子胡同と呼ばれていた。この鉄獅子胡同という所に新しい校舎が建てられ、西側は陸軍部に隣接し、南側に校舎、北側には附属の建物が造られていた。陸軍貴胄学堂は陸軍部と同じ正門を利用したのである。陸軍貴胄学堂の旧跡に近づくため、現在の北京市東城区張自忠路３号（以前は段祺瑞執政府旧址と呼ばれていたが、2009 年に清陸軍部和海軍部旧址と改称された）を訪ねた。持っていったカメラではその建物全体を撮れなかったため、ほかの資料を利用して当時の建物の様子と現在の様子を対比すると下の図のようになる。写真１は、清末の陸軍部が軍事視察を行っている状況に見えるが、写真２は、現在の様子である [5]。

写真１・２に写されている建物の東側が当時の陸軍貴胄学堂の所在地となった場所である。また、1909 年に当該学堂が作った『陸軍貴胄学堂同学録』には、陸軍学生と教官などの集合写真、学堂監督、学生写真などを載せている。貴重な資料と思われるこの『同学録』は、浙江档案網（档案データバンク）に入っており、そのうちの一部の写真がネット上で公開されている。写真３は、第二期生と教官などの集合写真だといわれており、写真４は、『同学録』の表紙である。

写真３

留学生を送り出したもう一つの学堂は八旗高等学堂である。この学堂は清朝を創った満州族の子孫を教育する宗室官学から発展してできた学校であり、1949 年には現在の「北京一中」となっている。古い歴史を持つこの学堂は、1908 年に学生を 15 名選んで早稲田大学清国留学生部の予科に入学させたことが分かっている。辛亥革命

写真４

以後、満州族の子弟が多くを占めているこれらの留学生はどうなったのかという情報については、今回北京市档案館で見つけた、教育部から京師第一中学校（1912年に八旗高等学堂から名称を変更）宛ての文書から、これらの留学生が派遣元に生活支援を求め、官費を続けて支給してほしい旨の内容が読み取れる。

報告者が北京市東城区宝鈔胡同にある北京一中を訪問した日は授業中だったが、幸いそのまま中に入ることができた（写真5）。北京一中の正門から入って、すぐ左側に下記の写真のような碑亭が建てられている（写真6）。碑亭の上に「北京一中碑亭記」という横書きの看板が掲げられている。この「碑亭記」の文字によって北京一中の沿革が簡単ながら分かる（写真7）。碑亭の真ん中に立ててある石碑に刻まれた当時の文字をじっくり見れば、光緒20（1894）年に八旗官学から八旗書院に変更した経緯についての説明であることが判別できる（写真8）。

写真5

写真6

写真7

今回の調査期間は16日間で、元旦から3日間の休みや公共施設の休館日を除くと、実際に調査できる時間がもっと短くなったが、このように限られた日程を効率よく利用して、陸軍貴胄学堂の旧跡、八旗学堂の旧跡、北京市档案館、中国第一歴史档案館、中国国家図書館、北京師範大学図書館などを回って、写真を撮り、関連史料をいくつか入手するなど、有意義な研究調査ができたと思う。そして、北京滞在中に、北京師範大学の万建中先生に温かく歓迎され、わたくしの研究内容と滞在予定の説明を丁寧に聞いていただき、適切なアドバイスをしていただいたことは、非常にありがたいことであった。今後は、貴胄留学生と八旗留学生の子孫を対象に聞き取り調査を行い、当時の留学生らの生活状況を検討するために、より豊富な資料を活用したい。

写真8

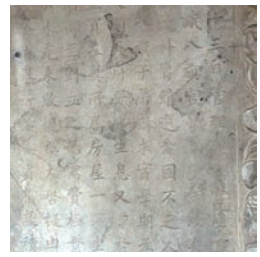
写真9

【注】

(1) 外務部「奏陳尊議出洋学生章程折」、陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編・留学教育』、上海教育出版社、1991年、16頁。
(2) 前掲書、32頁。
(3) 董守義『清代留学運動史』、遼寧人民出版社、1985年、370頁。
(4)「貴胄学員之留学額」、『大公報』、1909年7月20日。
(5) 写真1は、『北京近代建築史』（張復合著、清華大學出版社、2004年）に見られる。ここで使っている写真1・2は、「百年回望之八十四陸軍貴胄学堂」という文章（http://blog.sina.com.cn/s/blog_56577d8f0100vavz.html）中の写真を利用した。

「献上された」海と「奪われた」海

―韓国蔚山広域市北区江東洞板只のワカメ漁場に関する歴史と語りから―

新垣　夢乃
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

「おばあさんは、『奪われた』というように話をする」。

これは、韓国蔚山広域市北区江東洞に属する板只（パンジ、판지）という村落でワカメ漁場の歴史についてお話を伺った際に出てきた言葉である。この板只の人々が利用してきたワカメ漁場には、複雑な歴史的経緯がある。本小稿では、板只のワカメ漁場を巡る歴史的経緯を紹介し、その歴史が現在どのように認識されているのかを紹介してみたいと思う。

板只のワカメ

板只は、2015年1月時点で58人の人口を有し、そのうち15人が板只漁村契に所属し漁業を営んでいる。板只ではアワビ、ウニ、サザエ、ナマコ、ワカメなどを対象とした漁が行われている。これらの漁は、海女（ヘニョ、해녀）が行う。そのうちワカメは、高麗王朝時代から王に献上されていたとされ、現在でも質の高いものであるとして地元では語られている。

ワカメ漁場の「歴史」

板只のワカメ漁場には、その権利を巡って複雑な歴史的経緯が存在する。板只に建てられたワカメ漁場に関する碑文によると、板只のワカメ漁場は、高麗王朝建国